

挫折と成功と

八歳のときから続けてきた体操競技は、中学生にもなれば資質の有無がはつきりしてしまふ。「オリンピックに出られる見込みはない」とコーチから聞いてきた親は、「受験勉強に専念しなさい」とるり子さんに告げた。体操クラブをやめさせられた彼女は、友達もいなくなり、時間ばかりが余って「生きがいをなくした」ようになってしまった。挫折そのものである。

「人生をリセットしたい」と考えた十五歳の少女は、「英語を身につけたい」と親が反対しそうな理由を見つけ、ツテをたどって小さな町の普通の公立高校へと、単身でアメリカ西海岸に渡った。はじめのうちは体育や数学など、英語ができなくても単位が取れそうな科目ばかり選んだ。「結果が出るまで帰らない」と、自ら退路を断っていた。

東海岸にある大学の体育学部を卒業するまでも、数々の挫折があった。帰国して日本の大学を受験させられたこともある。勉強もせずにビーチで遊び暮らしていたこともある。大きな転機は、アメリカでの一つの出会いだった。ルーマニアでコマネチ選手などを育てた名コーチ、カローリ夫妻がアメリカに亡命してきたのだ。「体操のコーチになる！」と心が決まり、それまで伸び悩んでいた学校の成績も英語の点数も格段に上がり、「目標が見える」と力が出るんだと初めて実感した。

大学を卒業したあとはカローリ夫妻のクラブがあるテキサス州に部屋を借り、飲食店でアルバイトをしながらレッスンを見学した。細かくノートを取りながら見学していたのが認められて、晴れてそのクラブのコーチになった。二年後にビザの問題で帰国。小さなクラブで結果を出して、当初は断られた大手のクラブに採用された。九一年には世界選手権のコーチにも選ばれた。だが日本の体操界で内紛が起こり、その渦中で彼女は体操界を去るようになる。九二年のバルセロナオリンピックを目前に、道が途絶えた。

しかし通訳として仕事をするようになった九六年のアトランタオリンピックで目にしたのは、日本チームで四人、アメリカチームで三人もの彼女の教え子たちの姿であった。子どもたちの才能を発掘して育てる力があつたのだと、自信になった。

日本とアメリカの流儀をうまくミックスして

コーチ時代には、結果のために手段を選ばなかったと言ふ。

「イヤなヤツだったはずですよ。わざと評価が低い子どもたちを集めてトレーニングして、上のクラスのコーチを負かせるんですから、



天使はかならず降りてくる



のむらこ 野村 るり子さん 教育コンサルタント

プロフィール 1961年東京生まれ。中学校を卒業してアメリカに単身留学。軒余曲折を経てペンシルバニア州立大学体育学部卒業。日米双方のクラブで体操競技を指導。慶應ビジネススクールでMBA、ハーバード大学で教育学修士を取得。2000年に親ホープスを起業。代表取締役。 URL: http://www.hopes-net.org



ベラ・カローリが経営する体操クラブでの指導風景

クラブのリーダーには信頼されるんですけど、友達はあまりいませんでした」。自ら起業したのは、日本の通勤電車の中で人にぶつかっても謝らないような人々がイヤだったし、東京の雑踏で流れる人波にのみ込まれたくなかったという一面もある。折りよく日本では一芸入試やAO入試などが始まったばかり。タレントやスポーツ選手などの大学受験を手伝い、彼らの仕事と学業を両立させる道を開いた。起業以来七年、現在の企業向けの研修で利益を上げながら、個人の就学からキャリアデザインまでのコンサルティングを続けている。

個人として、また集団としての成功体験を問い、その人のスキルを探る。それはたとえば笑顔や楽天性であったり文章力や計算能力、戦略眼などであったりする。なるべくポジティブなことは自分を評価させる。さらに自分の将来の希望をさまざまな角度から遠慮なく書き出してもらふ。そうしたアメリカ流の合理的な方法に、日本流の協調性を混ぜ合わせて相談にあたる。固定観念にとらわれず、人の本質を見る。何が「成功」かと言えは、「生きたいように生きる生き方」ができることだ。しかも、いつでもやり直しがきくという信念がある。目標を明確にし、時機を待てば「かならず天使が降りてくる」。そのとき、ものごとはかならずうまくいく。

(取材・文 古家淳)